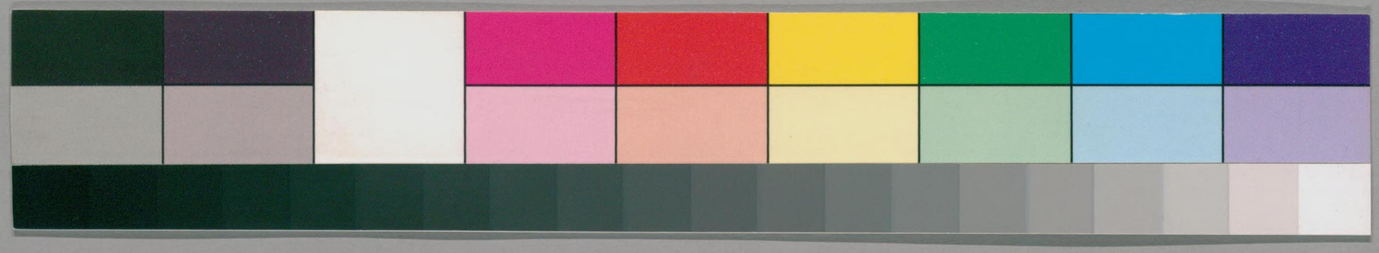


日本歳時記

巻七

839
7
87

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用
839
87
7

帝国図書館蔵書

十二月 前と小冬と云ひ十二月の異名 師走 極月 殿月 など大略同じ云々

むかし佛名と唱ふるの日あり 奥儀抄に九月九日より十二月晦日まで三十日の間佛名を唱ふるなりと云々

朝日殿の代より建長以来十二月十九日より廿一日まで三日の間佛名を唱ふる例なり

殿の正月元日より四佐こと〴〵く参内して節會を奏す 今日まで公事ありしかば此日を元日と云ふなり

相馬藩邸氏寄贈
相馬文庫

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』　請求記号 839-87
ガラス使用

八日となりて臘八となす今日竈を祭る事八月節の如し
〇一説に記す十二月八日近隣の竈神と行業善悪を竈とをつるもの風俗なり
物を与ふる風俗あり
祝融氏まつり黍をそなふ
こゝにて祝融と竈神とするもあり〳〵又雑事記に
こゝにて祝融と二神を今乃人は専ら竈神のみ祭れども
無論炭釜雑器に至迄悉く竈神を祭るなり
〇今日水を汲て入婿重〳〵敷人宜よ
臘中の浄水来年酒を一切悪敷醸ざる故八日水

臘祭なりとあり
十五日釈迦仏涅槃忌日なり破邪顕正の尊像を掛
年二月十五日仏涅槃すとあり周代なれば十一月とす
家方とす唐土二月八今此十二月なり古今世二月
十五日とするもの多く仏滅日とするもあやまれり
〇上旬或中旬の中臘月の第一の子多く米と粢
粉一てつくり四月八用とするもの是なり
又臘日に米と春くを時重事なりとぞん
菴主納田楽房舎弟石湖納豆の事
十麦稼真雑。各賦一詩以識風土。是一冬春作臘日

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

森に栄ゆる一叢計多聚林臼腐中畢事。菱之土
瓦倉甲経年石壊穴冬春来出芽七手
又新発

○十五日此夜屋中の煤塵を掃ふ。煤塵を掃に
世人多く朔日と定て恒例とす。然るに風雨の
甚しき朔日にて掃ざる日々あり。又風雨なき
朔日にも掃ざる家もあり。
あるいは中寒にもまたるるゆえなり

二十日　廿日正月中旬より後先人年始
廻書を遣志をいて賜月中旬
みな面々ひそかに縫繕ひ賜ひ烏帽子を
せざるそろひて装束の衣服をうるひ祭礼

くるまありせそろひといふ事まいとつみことを
部部共ありまた所事あり
○下旬此間親戚を遍拝して歳賀を賀す又去
年死歿家孤寡貧窮困苦者共を訪ひて財
物と賜ふ人師傅ある人
人秋分及ひ人の病と療せ警師をよぶ
治ることまつく物をとらず謝儀
物を贈ることせんとうけず
ほくく鄙吝なるべしの元鄙吝なれ
すん倫とまつく事をするを財を

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

とそそりにたくちくてのきのあり妻もけぬとよろこぶ

風土記曰。異蜀風俗歳晩相與偲聚又義之睡偲聚猪曰。大功之已收聚事也お作の歌乃ち其假拠不論貧山川相賀多富豪小大安豊巨細懽欣交慶歳暮祭神之義歟熊野先阯富人事靡殊猪光勲曰。多聚也お作の歌乃ち其微熟也春磨官庭放人少里巷隹節過忘歌舞風物唱多人和。これとやいはんまた歌舞に童子を遣ることもとそ

○又下旬九門年忘して父母兄弟親戚と餐する事

なりこれ一年の万事をすくる事を祝ふ又

餐を賜ふ別業詩曰。友人適千里懐袍尚暉ふ。仙客

ず後業釈那可追。問業安所之。吉天一渡已。

集添水。斜陽傳業都。酒初熟。舎觴之肥也。

一日歓。慰此客一年悪。勿暇業別仙与新業解衣

七勿回郷還元老白衰物もろ仁は特に衣帯を贈佐業映酒

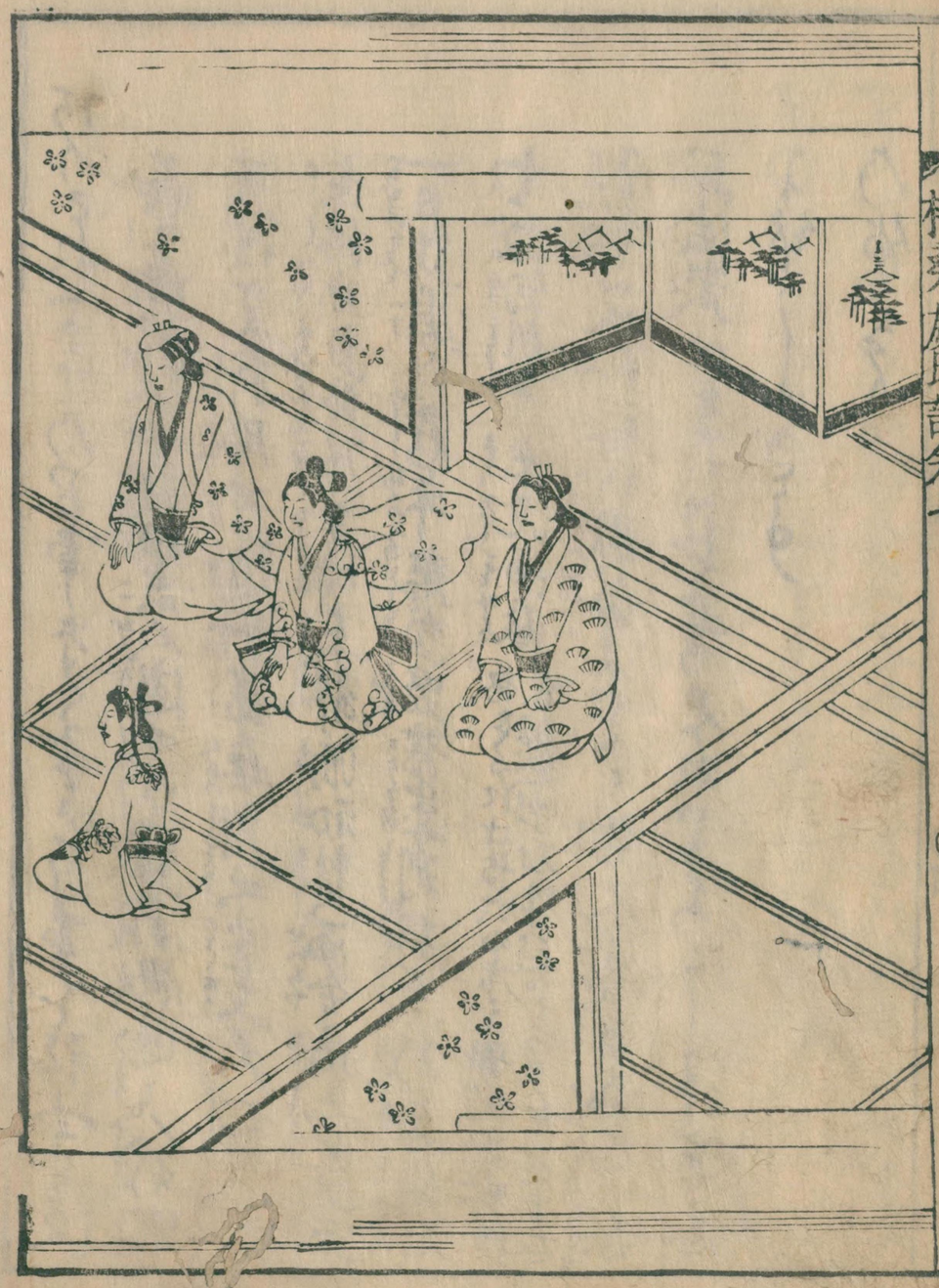
こゝろひとしく又郷郷代酔綿よ倉お邀呼お郷。こゝろ我園業志

回激散心業代後と考乃れいもろ〳〵業志

と〳〵きます

乃俗なり

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

○此月下の午の日かくしもちて上臈のぬけたる髪を一毛ももらさず一年の間箱に収め置て沈香に和して焼その灰を男子にかくよく能よ好む

二十六七日　此比餳を製すべし　此日より初めてちよ製するよのつねは大麦の芽の内に別に糯を作り今日は寒に用るものを上に製し置べし　腕水にて餳を製するは八味美にして久しく堪へ且性和なる者なり　飴はじめに用るは日数多く歴たる者堅硬たる者なく製するを澳飴大麦の内に製して色その黒白より水飴澳重は常にやりくりもちて餳を製するによろしく色酒氣

あり家に米をとりて又は粟米をあまくたいりさまに酒くはふ阿魏は死ありしたる人物一つひ酒に入れ漬に入る餅れすりに用ひえしくあまりて酒氣あり云し其下黒を用れは餌ゆりまずく黄なれはよろしく用にたすけつこして酒に入れよ黒を用ゆて醗酵のよく糯米を製すれば醫書にもかて且又とかく害しく餌の酒をもこれ入れは甘くなりし此者へしと能ありくまれる赤ひ外得

二十八日　屠蘇を合すへし

○醫林集要屠蘇方　大黄　山椒　桔梗　肉桂　防風

各五分 烏頭 白朮 藪藭各一匁 右八味對之絳嚢に
入り清白に井中へ掛元旦より飲初
嚢共ゟ酒ゟ漬し置藪藭ゟ事の如くこれを飲後
に嚢ゟ井中へ入れをき又服すべき事寒暖を
不論日々如此
○又方 本草細目ゟ引く陳延之小品方ゟ出ル元旦飲ゟ腎腰痛一切不正之気ヲ
治ス 藪藭 五匁 蜀椒 烏頭 各五分 赤小豆十四粒 右三味乾ノ
上絳嚢ニ入ル 赤小ハ蒼朮ゟ事ゟ如く炒ル 朮ハ赤小ゟ事ゟ如く炒ル
○又方 当于月令廣義 大黄 一匁 桔梗 蠶川椒 去内各一匁五分 白朮
桂心 各一匁 烏頭 炮去皮脐 呉茱萸 各一匁 防風 去芦一両
○本朝屠蘇方 朮 桔梗 山椒 細辛 各一匁
大黄 二匁半
○白散方 朮 桔梗 細辛 各一匁
○瘧癪散方 麻黄 一匁 山椒 細辛 防風 桔梗 蠶
白朮 肉桂 各五分 已上三方典薬頭兼安信濃方也
○以日ゟ縄と俗ニ云ふ 晝法元日ゟ條下ニ詳ゟ用ひ
晦日 又法日 沐浴 晩食後 灸治 晩食後 灸治ゟ事ゟ如く
長刻慶賀ゟ客ゟ招ゟ事ゟ如く 家内ゟ者ゟ

注て賀すべし

○屋甲及宅中を掃除し門松をたて戸よ

泊連縄を曳くべし屋

作り始めるなり

○今朝と除夜とに二年の祓ひ

乃至最初より更に一年の祓ひ

なくして叶ふ事なし

年もて此事をなすもの

周公の風を見るがごとく深く

願ひ家内之分業は一年の祓ひなくして叶ふ事なし又俳諧師は今朝なれば人のこゝろ

年むまつるまじきことなり

と云ふ座敷乃至諸人作用をくるしむ事

○今朝は座敷及び庭を掃除す竈よりて香を焚く障郭祓

座宜敷し。又外竈の焼を焼しよりて

所ごとに焼を焼し燈ろうに火を点ず多く焼く事実明

けて雨湯気を動へし又七日を散ん気と和順よ

ふるまひ人と雪雪ふる時を窓して気を傷

事なり是を慎しんで祓ひ事なり是を掃ふ事

花ぞくしむ○今年中一家と用ありて
○今年中一家と用ありて
歎い疫気を避と田舎へ
歎い疫気を避と田舎へ
本を久く歎い疫気を避と
本を久く歎い疫気を避と
○俗に云今宵節分
○俗に云今宵節分
出ようひを悪鬼乃表紙
出ようひを悪鬼乃表紙
浴湯寮さいをんとよのうち
浴湯寮さいをんとよのうち
ありくおろしをそのうち
ありくおろしをそのうち

おこととりつく迫来仕
上人おこ御殿のうえ
いそふさをとうとう
らふもうまれる
又元弘三年天下統
始御在位十年大権
興行の石清水善導
童変勅宣にて二所乃
海乃波ぎ切るとて
帝に奏しそれより
乃ちとりて今まで

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

いりて鬼氏同じとうちうしよりて
俗の名不經の妄傳ありて
ふるき也也とかうそんを
傳ふ疫とおいそこてうそれより
閉給孔德璋ものせて
狎侯ありまうさびしくて
衡の東京賦よ祥をりて又
うこさすくそ漢書ひて
申しまあまいハ今 圖作よ
やおれやうひとハ鬼とおへとそ義あり
傳とやらあくいうまりあらふとハ
追とうまりおうを又大

きてくり志ろぬ人のまるこたよ角市
そろーき都ろ和ありくおうまり
と都ろ淺都ひ墓墓とさしく
をうこそひ物年ハいれとおいそこ
りひさ物ろれっと都魚のりもちをめそ
善ろり陪ろ西まりひあく湯とお
又圖作ろうのよ鬼
なり物とよよ古人ひ弱
時弔作」ま都抛擲。手ろ
大豆と投くる鬼氏服とうし
ふ事よ志りすのつこそり
鬼をこそ言ふらこぬそやこひ今ま
○今お一のから大敗と

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

鬼ノ人ともらんとも定まらず扶
嚢物にのみ入れこれを又窓
もるにてすべて土をも
ゆれい上下の法をいそ
こゝの書よ抱翁畫稿。扁
幽鬼とも女くさきものよ
○屠蘇と今日より井の水に浸し重ね重ねの
漱ぎ齢の深秋乃酒よ
一杯案酒半盃酔。生看
明日老。松斜お翁不
知老

又屠蘇ノ称ゆ
旅館を飛脚に眠。安ん
思千里。秋髪。明朝又一年

又方秋歴ク

又玉漏ク

今案に暦を明年の日供。色浪二杯一春亜二五一
更ゆ氣色六年改。客新
暗意催。風光人不覚。已
去後園梅一

古今集に書送別樹

こよひこそよしと夢みて[illegible]

続拾遺集に於藤原基俊

[illegible]

玉葉集にて[illegible]

[illegible]

堀川百首に 國信

何事を[illegible]

又 顕季

[illegible]

〇此獏の形を圖して枕に加へ侍れば悪夢を避くと
て今の世俗にもおこなへり俗説に獏を蓑と合ふ
熟字なりこれを用ゆといへり
按ずるに獏は爾雅に出たり鉄銅及竹をくらふ
唐氏白居易が貘屏の賛の序にいはく象の鼻
犀の目。牛の尾。虎の足。寝其皮避瘟。圖其形避邪。今
俗に[illegible]之白澤。又漆[illegible]
腥外之氣これらの説を[illegible]邪氣を
避るの[illegible]
今[illegible]

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

書に大儺の時侲子をもて方相氏とする事有り
山海経にも　みえたり　されども儺の事なし儺に象ハ聰耳の
思想にして形似たるものにて似たれバこれと合せて見るを
こゝろあるにや事の始りより元世俗の人書に画きて
と禁せし一日は正月の節分に行ふ事して是正し
かくぬるやうに是なりかくのごとく夜は象を去る風俗
の事にあらずといふ事を人おそれて巫祝に託してそれ
弟子ともまねかせん事と我の様になすのなるまじく候
世にし給ふ古人の言に癡人の面前に夢を説く
かくのごとしといふ事を挙げてあるなるべし
凡夢は人の周礼にも占夢の官ありてみる夢の

乃祝に東方の象を書て悪鬼を攘除
又夫の東方の夢の神の説あり考ふべし
○又と夜半に書を讀して縁の下に藏すれバこれ韓退之
が送窮文に本づきたるやと或人を非とし利欲
に溺れたる世俗の通患なりと思へバ我まだ何を探く欲
あるべきとやと人ねがひ夢によりてもとめたる事を
見るもかくいふ俗人はかくいふ事なりしと婦人
女子のたはぶれにて言ふ人のなるべき
○世俗に立春の夜は節分に人家に豆を撒き疫鬼を祓ふ
よびて年の夜は年男の人家に錢を設して節分にはまくせ
是を祝詞とのべとりて錢の響を撒ます京都

改悔の後多くは鄙に
これらの婦人女子のわたりて夫妻の
へき事ありて元世俗よ虎にて男女とのく年
数よりて此実ありて
年あり此年よあるひは
みそてる実とまぬる
とをぐこれと幸
事ありこれとは事
日常の犯
ありや仏閉経よ大

大正此年とは七菜より九歳と加えた十一菜よ
まくとより七歳十六菜二十六歳三十一菜
三菜也年二菜六年一歳
老陽此数たり陽極れる
没よ月とそより老これ
非とより此年無事とをはるの
都とを設よりこの虎年の事を
仰の法を石祥より
暮とたり画とさけば
へ多乃約とは

或曰人ひとりに物施せさるしもりといふ事も人
の吉凶禍福あるハ天命なれバ何ぞ其のまさひ
とまぬかるる事あらんやこれ凡年とハ事を疑ふ給ふ
なれバ修する人ハ信する人もよく敬ふべきにぞ
あるべし是ハ冬至の後第三の戌の日を臘日と号し
此日神をまつり又古の聖賢民に功ある人をまつる
よし漢書儀に見えたり又玉燭宝典に臘ハ先
祖をまつり蜡ハ百神をまつる祭にて是ハ冬とかり
小寒大寒三十日の間今世俗に寒の中と称す此
間に食物薬物等を製する事ハ其性よくして久しく

たくハへて損せず此時製する物をここに記す
○乾薑を製する法　母薑を寒の中のうちに一七日
水に浸し日々湯にして取あげ皮を去日に干貯へし
○山薬をこしらへ貯ふる法　此法寒中にほりたる
年久しき薯蕷を洗ひ細切りて皮を去切へぎ
て米粉をまぶしかけ寒につてぬるき焙乾す鉄を忌む
○糯米と粳米を清水にさらす法　一日ハ水に漬し
一日ハ乾す如此する事七次許久しく浸せハ米の気
ぬけてあしし糯米ハ末して糰餌とし粳米ハ飯
とし粥として病人に用れハ泄痢をとどめ腸胃を補

てん服よたづまし

○按来と名く胭脂よとる法
浸し蓬藾汁よく熟よ入好墨よ一周
乃至数湯よ漬せい速よ解とたら乾布よて胸脇よ
塗布寄あり跡形乃消布よ包てこれと沸湯よ
投すよい急よ用途布よて「の字」形よ
○鶉茶代粉と名く能よとる法 上白代鶉来と常乃
ごく腐月の水よ浸し毎日数と改く二三日色よく石
臼とよく洗ひて右代来とよく磨しよいのう
にごとし澤とい再び石臼よてよく磨してよす

あらた桶よ入数を加え一枚垂よく漬めて去りよく
毎日水を換よく水気をとる
の新袋よ右代粉と入こと三日よもとる後擦布
水とよく洗ひて右代来とよく磨しよいのう
よ去りよくつきよ入へくらす多くれい
よ去りよくつきよ袋ふ入へくらす多くれい
去りて袋よりおしのこりよくつきてよす
時よこのりよて漬半ごとりよりよく乾きて壷
ふ入ふとりて氣の漏ぬやうよまへ一周乃時乃
くこねよく餌よ一湯乃沸湯よ投して後熱水よ漬して
食し出事当汁よく再煮て食し又赤中豆の煮て

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

くてもよろしく食
ころめ脾胃を獨ふ事
食氣滯あるまで用へ
○病の至ると
もりてこれ等を入
年と病久くて出
ものまで用てもよろ
○風邪ふく粳と紫
よいれ又二三百
ちく又風ふいた
黄と次第久
至影を衣ち用
と名塞ぎ久
を撰へし二月
来影を去れ
○風ふいて事
事皆大至と
飯食のお後
ふさえ次第

藥室此内ふく通
黄と次第久
至影を衣ち用
と名塞ぎ久
を撰へし二月
来影を去れ
○風ふいて事
事皆大至と
飯食のお後
ふさえ次第

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

乃潰さらにむしてよけれ
触にて熬してあつきを
丸ず一白みそよくほぐし
まぜてを同し
如くれいの粉と功とを多く
豆汁にて潰して能熬
くなるまで熬せんとれいの大豆共けぬを
てのすてなる赤土粉の味あり
二三年一粒ずつ
黄れい味格せり

○白集醤乃製法　大豆を右五升ほど
含くよくうとうさ桶よ
風の味格せり首く色白し

○五斗味噌と製する法　大豆一斗麹一斗汤糟一斗
米糠一斗塩一斗右一つよつさ含すりぬいて
よし此味噌性好く腐
魚肉なと煮るによし

○ぬかそと製する法　米のぬうてかくね
頽みて能むして熬し
亜望日多つまう時

蒸し熬して上白乃米麹
含くよくうとうさ桶
風の味格せり

○五斗味噌と製する法　大豆一斗麹一斗汤糟一斗
米糠一斗塩一斗右一つよつさ含すりぬいて
よし此味噌性好く腐
魚肉なと煮るによし

○ぬかそと製する法　米のぬうてかくね
頽みて能むして熬し
亜望日多つまう時

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

并醤油のくとを入白みそ
乃ち炒りくとさまし梅ぼ
ちくと亜米酢を入又白ごまを
炒りつぶしてかの
ごとくす
○又法　ぬくとまくかうくこひきあぢ堂の内
に漬のかとよろしくあり梅ぼしを入至十
ヶ日許をへてかうしおぢ白ごまをつきく
くきみとをなくとをいき白みそをすこし梅ぼ
てを親ぼくを好入をくんなべくに右二法ともに久
くをへて味変せず

臭気良法あり腹中に風気
病人に用ゐ
○屠鬼と姫滝とを去法　屠鬼を毛を焼去
腸とを洗ひすこし姫を一ところ入
又ひたりを漬行みよく姫と多くことを入又かみよ姫と
よく付呈とつきとをてかうして紙合せさうしてほりて
一夜とけば姫ゆきとろありて腸紙よつてをとと
菟とつきて炒りさけ黒くなり姫滝ばかせたる
○姫滝鍋乃法　滝鍋をとり姫と多くほきを
梅ぼ入もつめの如くなりぬれば一夜をきあくと

合せ一服くすべて被すべし
又薦を包て其くゝりを
よく包縄をよくまきて
おもしをして塩出
一両日にて塩出
○魚多勝漬乃法 魚一升に塩一升
一日一夜重 麹一升に塩一升
まぐろ塩を法の紙をかぶせ
かんなくずを入れ塩と同じ魚多の塩かげん
多くして漬して塩と出
魚多と勝て漬るのも

ものとかをとりへ
有あるの縄を其まゝ
ものを風引をよく拭
を粉と二度用てを
塩ものを加へやうけ
○鮭鰤等の塩引
塩ざけをよくぬぐひ
切もの塩ものとも
上をこもにつゝみ重
○乾大根ともに法

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

根乃事ゝ名ゝ繩乃通ゐ穴をあけ小繩ゝ通(とほ)くく
風雨雪霜をさけ次日乾(ほし)かようけ重て大きの
俵ゝまて元三ゝ日をすぎ〳〵五寸長ゝ日ゝ
取(とり)出(だし)てゝ叩(たゝき)ひら〳〵ゝ
あく柏(かしは)ゝ葉(は)ゝ風味甚(はなはだ)佳(よし)
○胡蘆蔔(せりこん)乃つけ物(もの)と製(せい)ゝ
大なるを五ゝ六ゝ分(ぶ)ゝ切(きり)ゝ
つゝ重(かさね)ゝ漬(つけ)ます〳〵初(はじめ)より
そゝてつゝれい味噌(みそ)ゝ
半夏(はんげ)をゝそゝつけます

人乃生(うまれ)ゝ産(うぶ)より葬(ほうむり)の事(こと)ゝ
俗(ぞく)ゝれい口吉(くちよし)とたらふ次乃
如(ごと)くして編月(あみつき)ゝ
湯(ゆ)ゝ取(とり)ゝ泡(あわ)をれい毒(どく)ゝ
うせ次(つぎ)ゝ面(おもて)ゝ又(また)ゝ的(てき)ゝ
乃(の)ゝ後(のち)ゝ生(うま)ゝ子(こ)ゝとひら
入(いり)ゝ口(くち)ゝれい毒(どく)ゝ
産(うぶ)ゝ乃(の)ゝ雫(しづく)ゝを貯(ため)ゝ
俵(たはら)ゝ入(いる)ゝ事(こと)ゝ
契(ちぎり)ゝ風(かぜ)ゝ後(のち)ゝ

統一切の瘧疾及瘧毒邪毒時疫を治し一日疾をいやし一二日疾をいやし甘草炙りて久々煙をとりて世次又数百果菜蔬の類の様々と浸せい実多くして尚又腹内を浸せい久月を按ずと治むと凡今庶義よりえらびて食麹とのりに煮て出拠姉等の表をすれいて不出瞼凡よろめえる香油と焼き塩すり出い後不入膏某に用て邪効のり婦人の乳よりぬれい製まく完りて丸ずまぜす久々義まく紛末の用ふべし 作食薬

これを用ふ功他油と倍ひ又腹月の按腹とも前ひて膏某よりも合すべし 二月令庶義を五月ころ丸ず納験敏まとぞ十月ずりの月までの月ぐ一ろめぜまく綿生世の枝と切て立春のおよ地を掘い月忍冬茎と納ふべしそれと六月まれまく慶そのの癌疹を癒す 冬月甚寒して病ふの者ろまく当吟て薬飛ず 冬月氏に居まく冷気をまぬり口腹すくこと口噤ぜ 徹氣あらい先をまぐる吟衣と脱去て当ぐれまて腹

なる衣をとりくこれをひたしめ米と炊爛して袋に入んとよく舂すべし米ひゆる又他の袋よ炊爛したる米と入てく舂すべし一斗を舂ては別に漉よあり自用氣同くして保存すべし生ものゝ後ち蕎湯温酒粥なんどをたくさんと温ずべしてよくあぶる時い冷氣と寒氣と争てく泌ずる又雄黄焰硝等分を用て書ことく眼角に塗よ

痰涎拘急よりて十二月中旬より翌月令慶義よりて猿肉猪肉生椒と食ものと忌ものゝ果葉と食ものゝ

朮ハ筋骨と食事なれ事書に書ことく鹽と食なり此人と害す牛肉と食ものゝ果葉と食ものゝ

事なれ是を忌べくは月のこと牛乳と食べし他月これと食べい病と発ものゝ

損軒乃説よ雑書の中はこの多し毎月其物と食べい其病と発ものゝ

又野猪湯家の物忌と記ます記そ又ふ色とうふ古代方書にをいまこと記さる家説ハ草に

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

作ものゝ次とそうもの
たとをもつて載(のせ)て人々の披閲(ひえつ)を便(たより)とうれ可(べき)の
乃(すなわち)人(ひと)の撰(えらび)これと私(わたくし)をとゞめざるの至(いたり)
十二月の古候(ふるきこう)牙一居(がいちきょ)小郷(こごう)孔(こう)二候(こう)あり
小(こ)を孔(こう)二候(こう)あり 半四雛(はんしひな)
水澤腹堅(すいたくふくけん)大(だい)を孔(こう)二候(こう)あり 大一雛妃(だいいちすうひ)乳牙(にゅうが)五(ご)佰(ひゃく)多(た)属疾牙(ぞくしつが)云(いう)
半八月令及(はんはちがつれいおよび)呂氏(りょし)春秋(しゅんじゅう)
準(じゅん)之(これ)を云(いう)
十二月(じゅうにがつ)盈(えい)校(こう)の訓数(くんすう)小(しょう)を云(いう)
異(い)反(はん)雅(が)之(これ)月令廣義(げつれいこうぎ)
日本歳時記巻之七尾

附 都鄙祭事記

正月

元日 禁中御節會(ごせちえ)○二日 東都年賀(とうとねんが)始(はじめ)○七日 禁中(きんちゅう)
兎角井(とかくい)菜羹(さいこう)○八日 十日(とおか)上巳(じょうし)
牙天(がてん)菜(な)橋川(はしかわ)粥(かゆ)○十日 西京東(さいきょうひがし)○十二日 南都(なんと)
月上(つきのうえ)修二會(しゅにえ)○十四日 南都(なんと)修正會(しゅしょうえ)○十五日 賣爆竹(ばくちくうり)
○十六日 禁中(きんちゅう)爆竹(ばくちく)○十七日 禁中(きんちゅう)御弓始(おゆみはじめ)
禁中(きんちゅう)御弓會(おゆみえ)等(とう) 弥生(やよい)梅等(うめとう)大(だい)般若(はんにゃ)
○十七日 始(はじめ)て梨子(なし)花(はな)○十八日 禁中(きんちゅう)爆竹(ばくちく)○二十日

八幡祭祢宜 廿五日と注れ侍る ○廿三日 春山春雪 釈迦忌毘舎 ○初寅 鶯うとく集

二月

朔日 七日と南都西京毛国中雪ふと三月堂行 ○廿日 行年祭 ○七日 十四日と南都薪の能 ○九日 十五日と 山階釈迦堂生身供修復 ○十日 少し麻苑寺祭 ○十五日 涅槃会 遮那大練供 春毛国寺祭 ○十六日 談塔 ○廿日 淀万灯祭 ○廿二日 天皇誕生 ○廿五日 道成寺祭 山階天満神祭 ○廿八日 吉祥法華八講初 ○初午 稲荷 吉祥天女 東獅子堂 東獅子供 ○初午 石山祭 粟津祭 土佐

三月

三日 禁中闘雞 伝云酒午元 ○又日 一条寺祭 ○六日 一条寺祭 ○八日 泉涌寺祭 今日より十六日と涅槃大会仏 ○九日 吹屋祭 泉涌寺祭 ○十日 今宮安楽花 ○十一日 吉祥会式 ○十二日 今日より四日と天台祖師像 日吉八王子の祭礼 ○十四日 壬生大念仏 廿五日と ○十五日 壬生永観堂 ○十六日 武州箱田川大念仏 ○十八日 浅草観音祭

○十九日　嵯峨釈迦身拭○廿一日　東寺仁和寺弘法影供
高雄　女院○中の午　午の日二つ有時ハ初の午を用　稲荷祭神輿出
寺佛　花園　宇治茶摘　石清水臨時祭

四月

朔日　江刕籠麻祭○二日三日　南都秋篠の猿○四日
廣瀬祭　龍田祭○八日　灌佛　山門戒壇堂開帳○
九日　清水地主祭○十四日　當麻の法事○十五日　三
井寺千團子祭○十七日　紀刕和哥山祭　新発踊
日光山東照宮祭　尾刕名古屋権現祭○廿日　勢
田宮祭○廿一日　高尾神供○上卯　稲荷祭　山縣祭

○上辰　八瀬祭○上巳　山科祭　江刕多賀祭　同坐田祭
○初申　大原祭　平野祭○初酉　松尾祭○初亥　大津祭
○中子　吉田祭○中卯　江刕八幡祭○中辰　向日明神祭
○中巳　久世祭○中午　賀茂祭　江刕若の宮祭○中
申　賀茂祭　山王日吉祭　宮上祭○中酉　賀茂
葵祭　松尾祭　梅宮祭　関白藤氏御参詣○中
亥　嵯峨祭

五月

朔日　賀茂競馬足揃　江刕松本祭○五日　賀茂競馬
藤森祭　競馬　関の明神祭○七日　今宮神輿御出○八日

ニ沽ス ○十三日 晴 別ニ記ス ○廿日
ニ沽ス ○廿三日 快晴 ○廿八日 紙帳ニ入ル
○晦日 紙帳ニ入ル

六月

朔日 廿九ニ當ル 雨 ○二日 ニ旅の出掛ケ
紙蘭舎ニ泊ル初 ○七日 紙蘭舎 今日より十四日ニ紙帳
ニ入ル ○十四日 紙帳舎 尾州ニ發ス
後朝天ニ入ル ○十五日 尾州ニ着ス 二年ニ
逢ニ初テ紙帳舎ニ泊ル ○十六日 雨天ニ付小倉紙帳舎ニ
今日より十七日 お國舎ニ滞在 ○十七日 雨

朔日 雨 ○二日 ニ旅の出掛ケ ○三日
紙蘭舎ニ泊ル初 ○七日 紙蘭舎 今日より十四日ニ紙帳
ニ入ル ○十四日 紙帳舎 尾州ニ發ス
後朝天ニ入ル ○十五日 尾州ニ着ス 二年ニ
逢ニ初テ紙帳舎ニ泊ル ○十六日 雨天ニ付小倉紙帳舎ニ
今日より十七日 お國舎ニ滞在 ○十七日 雨

ニ入ル ○十八日 紙帳舎ニ泊ル初 ○十九日 曇
○廿日 晴 ○廿一日 朝ニ紙帳舎ニ泊ル初 ○廿二日 大坂ニ着ス ○廿三日 雨
○廿四日 雨 ○廿五日 晴 ○廿六日 雨天ニ付
逗留 ○廿七日 雨天ニ付 ○廿八日 雨天ニ付
逗留 ○廿九日 雨天ニ付 ○晦日 雨天ニ付
逗留 ○七月 朔日 雨天ニ付 ○二日 雨天ニ付
逗留 ○三日 雨天ニ付 ○四日 雨天ニ付
逗留 ○五日 雨天ニ付 ○六日 雨天ニ付
逗留 ○七日 雨天ニ付 ○八日 雨天ニ付
逗留 ○九日 雨天ニ付 ○十日 雨天ニ付

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

○十三日　十五日と共に祭を修す　鶏○十四日　禁市　鶏○十五日　八幡出兵の吉　三軒寺と合祭　英彙施餓鬼　今日より明日と云迄山石動の日なり　十七日と云蒲団を敷く　十六日に云吉日なり　松の緑妙法の字を切抜き　松の緑妙法の字を切抜き　紀の参仏者とり　去年は此日より今日迄

勢別宮参詣とて八〇十七日　幸名の幸日なり　○十八日　市立　○廿四日　如意祭　○廿五日　御霊祭

八月

朝日　禁市　八　三方より海苔を売　松尾お櫛　和泉国より

村祭　此日まで　○二日　堺天神祭　○四日　少将天神祭　御霊

敷雲気吉祭　○五日　浜別宮鶏一羽　八幡へ参詣　○十五日　御市　八幡祭　若宮八幡祭　当宮　畑枝祭　八幡放生会　本社

云伝宝祭　大坂江川より花火　幸橋川八幡

祭　七門市海祭　鶏祭若侍参詣　○十八日　御霊祭　○廿二日　鹿隆寺より仏

祭　○廿三日　廿四日と両日大市　○廿四日　吉岡祭　○彼岸参

府天神祭　○廿四日　吉岡祭　○彼岸参

九月

○一日　幸祭　末幡祭　○八日　泉酒を今朝参　○九日　鶏当祭

当祭　脱殻祭　幣帛御当宮へ参　大坂生魚祭　鶏渡

云良大明神祭　肥えの当浦より祭　○十日　下寺祭

大津宮後多条　五條天皇条　神代の条　俗説天狗条
○十一日　伝教大師　御入滅　高雄にて修法御被香○十二日
志賀条○十三日　白川条○十五日　宮参条　栗田口条　祇園開
祇て三年に一度祭る　洛内下京　北野二十五社の内下京
山王祭条　日吉祭○十七日　松尾祭　稲荷祭　賀茂祭　建仁寺門前東条　鞍馬
の火○廿二日　大坂生玉祭　堂島　天満祭　住吉祭○廿三日　関の祭
本願祭　浄土祭　麻布祭　神田祭　深川八幡祭○廿五日　天満流灌頂
田条○廿六日　小石川祭○廿七日　松尾神幸　大原
五節祭○亦巳午　月次祭○亦申　安養寺修方祭

十月

又日　奴留造之忌　十六日より浄土宗修学会　十夜○六日　菊数無病
寺法華会○十日　伊勢例祭　十六日より浄土宗修学十夜○六日　菊数無病
三日　日蓮宗彼岸○十日　潜岐講　廉中院霊宝虫干　松尾祭
祭礼○十六日　高福寺開山忌○十七日　内侍所御神楽○廿日　江
戸銀商人寄条　四條吉岡　吉住　各社祭礼　神楽

十一月

八日　ふいごう祭　指物祭　○十五日　宮地祭○廿二日　一陽来復
廿四日より　大師講　御影供　廿八日より
春日御祭○御日　宮寺祭○初申　大宮権現祭○亦酉　鎮座祭

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

839
7
87

保里吉志

十二月

十五日、八幡宮(はちまんぐう)御(ご)祭(さい)。○廿二日大佛寺(だいぶつじ)にて○十九日 芳(よし)
村(むら)公佛名經(ぶつみやうきやう)の晦日 祇園(ぎをん)會(ゑ)を行(おこな)ひ 其(その)夜(よ)より
乃(すなは)ち年(とし)の○節分 各(おのおの)豆(まめ)を取(とり)て
此(この)國(くに)の大豪士(だいがうし)と名(な)乘(のり)て多(おほ)く鬼(おに)を
逐(おひ)歌唐(うたがら)使(つかひ)等(ら)打(うち)笑(わら)ひ
ゆくるのを

勘解由(かげゆ)小路(こうぢ)家(け)記(き)

昔貞享五季戊辰三月上澣 雒陽書肆日新堂壽梓

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

839
87

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87